



TITLE:

<學界動向> 戦後台灣に於ける史學 民族學界：主として中國内地系學者 の動きについて

AUTHOR(S):

國分, 直一

CITATION:

國分, 直一. <學界動向> 戦後台灣に於ける史學民族學界：主として中國内地系學者の動きについて. 東洋史研究 1951, 11(2): 160-171

ISSUE DATE:

1951-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138918>

RIGHT:

— 學 界 動 向 —

戰後台灣に於ける史學民族學界

— 主として中國内地系學者の動きについて —

國 分 直 一

終戰後中國内地學界から各方面の學者が來臺した。新しい仕事場を求めて來臺したもの他に視察に來たものもある。

中國共產黨の進出に伴ひ、思想的に同調し得ない學者達で、國民黨政府最後の據點臺灣に逃れて臺灣大學に席を占めて、中國側接收後次第に低調なものへと下降しつゝあつた同大學に新しい動きを起させてゐる著名な學者達も見られる。

こゝに さうした來臺學者の中、主として私の接觸した史學、民族學系の學者を中心にその動きの一斑を報告してみたい。尙從來日本籍であつたが終戰後歸還祖國の喜びにひたつた臺灣出身の學者たちの活動についても觸れておきたい。

二

終戰後第一代の行政長官公署の長官として來臺した人は蔣介石氏と非常に親しい人だといはれる陳儀氏で、氏は日本の陸軍士官學校出身、蔣氏のスタッフの中でも有數の知日派の一人といはれてゐた人であつた。それだけに初期には大體に於いて日本の學校に學び、日本語の話せるといふ人々が各方面に多く來臺した。學界に於いても同様で臺北帝大接收委員長として來臺した羅宗緒博士は北大出身の植物生理學者でそのスタッフには日本で學んだ人が多かつたやうである。接收當時から、二・二八事件前後にかけての大學には藍色の長衣を着て洋靴をはくといつた特異な服裝のどこか大きな迫らな

い風格のある中國内地系の學者が、驚く程巧みな日本語をあやつる風景が見られた。齒切れのよい美しい日本語を使ふ于景讓教授は京大農學部の出身であつたが、圖書館長として活躍されつゝ、殘留日本人學者と中國側當局との間の斡旋に力めてゐた。

然し史學、民族學系の學者として有力な人はまだ來ておらず、研究的方面は史學、民族學のみでなくどの方面も大休止の状態であつた。

中國側の臺灣接收後設立された臺灣省立編譯館は日本時代の文教局編輯課で行つてゐた如き教育關係の編輯工作のみでなく、廣く民衆教化をねらふ圖書の編纂、翻譯による外國名著の紹介とともに臺灣研究を主要な工作とするといふのであるから規模の大きなものであつた。館長の許壽裳氏は國立中山大學教授、國民政府大學院參事、北京大學女子文理學院長その他數々の要職を過去に於いて經てきた人であるといふが、東京高師出身、嘉納治五郎先生に師事したといふこの人は非常に誠實素朴な感じの老學者でぼつりぼつりと日本語を話された。中國内地から來た所員の中には東京高師系の學者にして、國內の大學にゐたといふ人、戰爭初期に京都大學法

學部に學んだといふ若い人も見られたが、史學系の學者としては「廣東十三行考」の著者として日本にも知られてゐる梁嘉彬氏一人であつたと思ふ。氏は東大東洋史學の出身にして非常な研究的情熱をもつてゐた。當時氏が頭をつき込んでゐたのは琉球の史的研究で、殊に隋書の琉求國傳の琉求は臺灣に非ずして現在の琉球でなくてはならないとする立場をとり琉求即ち臺灣を指すものとする立場をとる日本の史學者の悉くを論難する論文を新聞に書いてゐた。

金關丈夫教授や私の「隋書琉求國傳」に見える他の土俗例はしばらく擧げぬとしても「長尺餘濶數寸」なる石器に至つては臺灣西海岸には廣く分布するが琉球には發見されない事實たをどう考へるか」といふ論難には梁氏も流石にこまつてゐるが、數寸もあれば中國の表現では尺餘といふし又、柄の長さを加へての表現と見てもよいではないか等と苦しい抗論をしてゐた。然しながら氏の執筆の動機は琉球を中國側が要求するといつた聲のある時であつただけに、純粹なものではないといふ印象を與へてゐた。

臺灣省編譯館の臺灣研究組は注目すべき意義をもつてゐた。それは日本文化の接收といふことを目指して翻譯陣を強

化するとともに、日本時代の研究の未完のものはこれがある程度迄完成せしめて、その成果を學界に提供せしめやうとする意圖のものであつた。従つて仕事の片づいてゐなかつた日本人研究者を留用して研究を續行せしめる機會を與へてくれた。臺灣研究組には理科系では昆蟲學の素木博士が一人ゐただけであるが文科方面では言語學の淺井惠倫博士、民俗研究家の池田敏雄氏それに先史學の筆者が加へられたのでどうかといへば民族學的研究の一つの特色を示さうとしてゐた。

この研究組の組長は臺灣史の研究家楊雲萍氏で氏が純情な理想家であること、許壽裳氏が優れた識見の人であることがこの研究組の工作を支へてゐたもののやうであるが、然し二・二八事件直後陳儀氏が長官の位置を去り、アメリカ大使をしてゐた魏道明氏が長官として來任するに及び許壽裳氏の理想は容れられず編譯館は解組され、許壽裳氏は臺灣大學中國文學系の主任となられ、楊雲萍氏は臺灣大學史學系教授として臺灣史を講義することになった。素木博士、淺井博士、池田氏ら去り、筆者のみ臺灣大學民族學研究室に移つた。

許壽裳氏は編譯館長時代に屢々氏の友人魯迅の追憶記を書かれたが、それらは「魯迅之思想與生活」の小卷となつて臺

北で出版された。然してその後間もなく賊の爲に不慮の死を遂げられた。それが二・二八事件直後の不安動搖期の世相を反映する事件であるだけに氏を知る人々は氏をしてこの時期に際會せしめたことを深く悲しんだものである。

當時先史學に關心をもつ二人の若い學徒がゐた。福建武平縣城南の丘に於いて先生遺跡を發見した梁惠博氏と金山訪古記の著者金祖同氏である。梁氏は廈門大學の林惠祥氏と連絡をもつてゐた人のやうであるが、臺灣にくるや教育處の督學官を経て高級中學の校長となり、研究者としての生活には恵まれてゐなかつたが、華南先史文化と臺灣の先史文化との近縁性に關心をもち、豊富な有段石斧と、格子目の押型紋土器を出す臺北市龍口里の建國中學の校庭遺跡の發掘を金關丈夫教授、私らと共に試みやうと希望しておられたが我々は遂にそのための時間をもち得なかつたことは残念なことであつた。

金祖同氏は陳志良氏に共に奄城、金山に於ける先史遺物を發見し、江南に先史遺跡があるとして人々の關心をひき吳越地史研究會なる會をもつに至る機縁をなした人の一人である。金祖同氏は金關教授と筆者の尤大な臺灣先史時代遺物のコレクションを見るや非常な興味を覺えたと思え、臺灣に先

史學民族學研究所を作りたいと云ひ出し、運動を開始すると金關教授と私及び民族學の宮本延人教授の三人にだけだけのコレクションがあり、未完成の研究としてどのやうな問題があり、どの位の期間をかければまとめれるか等について書いてくれと云はれ、我々はそのためのリストを作製した。然しながら金氏がその計劃をとり上げてもらはんとした陳儀氏側近の高官は陳儀政府の交替のために去つてしまひ、金氏自身暴徒に襲はれたため臺灣で研究する意志をなくして二・二八事件直後臺灣を去つてしまつた。

一九四七年六月には臺灣大學地質學教室の主任教授で臺灣省立海洋研究所の所長を兼ねてゐた馬廷英博士を團長とする調査團が紅頭岐の調査を行つた。この調査團のメンバーは中國内地系、臺灣出身系、日本系の各グループとドイツ人植物學者一名から成つてゐて、終戦後最初のエキスぺディションであつた。主として臺灣大學の學者から成り他系では編譯館から筆者が一人參加した。地質動植物醫學等各方面の調査プランの外に金關丈夫教授はヤミ族の人類學的計測を、筆者は先史學的資料の採集を行つたが、民族學的方面の新資料としては、ヤミ社に於いて岩頭の曝葬 Platform exposure を金關

教授とともに調査できたことであつたがこれらは主題と離れるので詳説をさけない。

三

私が臺灣大學民族學研究室に關係をもつたのは一九四七年の夏紅頭岐の調査から歸へつて後であるが、當時校長は陸志鴻氏であつた。東大工科の出身で加瀬力氏原著の隕石、渡邊萬次郎氏原著の地中寶庫などの中國譯書をもつてゐる人で日本語をよくし知日派系の學者である。

かういふ人であるからその率ひる教授群には日本で學問した所謂日本系の學者が多かつた。文學院長の錢歌川氏はケムブリッジを出た人であるが東京高師を経てゐた。

その頃の民族學研究室の附屬博物館は戦争末期爆撃をうけた直後の混亂時代に比するとやゝ手を入れられてゐたやうである。それでも天井は打ち抜かれたまゝ、陳列用のケースは破壊されたまゝで、標本は殊に先史資料は壁土とガラスの破片の堆積下に埋積してゐた。宮本延人教授と筆者は資料をひろひ出し、原簿によつて出所を確め、整理したものに英文と中文の解説をつけるといふ仕事を約二ヶ月に亘つて行つた。

その結果かなりの資料が失はれてゐることが判明した。

當時史學系にあつて、こつこつ仕事をしてゐた人は少かつたやうに思ふ。その中にあつて、安南史を專攻してゐた陳荊和講師、中國文學系の所屬する人ではあるが福建語の研究を行つてゐた。吳守禮副教授などが印象に残つてゐる。

兩氏の研究の成果の一部はその後「人文科學論叢」にあらはれてゐる。この論文集は台灣光復文化財團の支持によつて一九四九年（民國三十八年）の二月になつて漸くこの第一輯を出してゐる。

陳氏の論文は「字喃」之形態及產生年代、吳氏の論文は、福建語研究導論——民族與語言である。

字喃とは安南語の *Demotic writing* を意味するものである。その論考は字喃之研究與喃文史料、字喃構造文析、字喃產生之年代の三部から成つてゐる。字喃の研究としては聞宥氏の「論字喃之組織及其與漢字之關涉」（燕京學報第十四期）があるのみであるといふ。安南婦人と結婚し、佛教と安南語をよくする陳氏は數少い安南史研究の專家として有望な將來をもつ人といへよう。

吳氏の論文は福建的人文地理、唐以前關於福建文化的記錄

與遺跡、福建民族的來源與構成、本文的研究對象、福建語有甚麼特點、從研究史上看福建語、福建語與唐以前的關聯、歷代福建方言的記錄、福建省內小方言鳥瞰の九章から成る力作である。その中、福建語の特色の形成時代を論じ且福建方言と標準語の分出する時代を考へ、一面日本漢吳音の關聯を指出した。第五章から第七章にかけての論述は日本語研究者にも興味深い内容を示してゐる。

民族學先史學方面の仕事の關心をもつ人は一九四七年にはまだ來てゐなかつたが、四八年の夏、華南からはるばる民族學研究室を訪ねてくれた錢宗頤氏のことは忘れ難い。

氏は廣東省文獻委員會の委員で南華學院教授兼文史系主任をしてをられた。又潮州修志委員會副主任委員をして編纂を兼ねてゐるとも聞いた。溫厚誠實な感じの人で「潮州史前遺址之發見」なる未刊の原稿と圖版をたづさへてこられた。台灣先史時代の資料を十分にお見せし、又參考資料として土器のサンプルをさし上げた。我々は台灣先史時代と華南のそれとの關聯についても話し會つた。それは殘留中に於ける最もうれしい機會の一つであつた。

廣東地方の新石器時代遺跡としては香港船窰洲の遺跡が

D. J. Finn 師により一九三二年に發見され、又、海豊の沙坑、東坑、石脚楠等廿一處の遺跡が R. Magioni 氏により發見されてゐることは Finn 師や Magioni 氏の報告によつて知られてゐるが堯教授によると尙、中山大學の楊成志教授によつて、汕尾、濱海等二十餘處に於いて多量な石器陶片が發見されてゐる他に、William. E. Braisted 氏（米人醫師）によつて揭陽、崇光嚴山上に於いて石器が得られて以來陸續として、採集が行はれてゐると云ふし、又、N. D. Fraser 氏（英人醫師）F. W. Waddell 氏（英人醫師）により揭陽西境河田村、河婆墟外及縣西北の五徑富縣城北黃岐山陰に於いて陶片が發見されてゐると云ふ。繩紋、網紋及び双下形花紋を有するものが出ると思われる。澄海城北山地にも石器が發見されてゐる。尙興味深いことは河婆を距る八里ばかりの地方に於いて學校建設に際し銅の刀頭、矢鏃及陶碗等が發見されてゐることである。この銅の刀頭なるものの性質が明になるなら、台灣バイワン族の青銅、もとは銅の刀頭、新竹地方の出土品である青銅刀頭の性質を考へる上の手がかりがえられるかも知れない。Fraser 氏の採集品は戰爭中損失してしまつたものもあるといふが、少數を除き倫敦に寄存されてゐると

云ふ。又 Braisted 氏のものは保存されてゐると云ふ。

堯氏がたづさへてこられた「潮州史前遺址之發見」なる原稿には「揭陽、黃岐山等處考古簡報附普寧之貢山饒平之黃岡石器」なるサブタイトルが見られた。氏によると揭陽、黃岐山、虎頭山頂の遺物は灰陶最も多く黒陶之に次ぐといはれ紅陶もあるが、彩陶は發見されてゐないやうである。然して黒陶にしても龍山期の標準的黒陶即ち漆黒にして光澤あるものは見られないやうである。尙興味深いことには黃岐山出土陶片中には含粗砂外淺灰内深黒の顔色を有する土器で、尖足式の脚（陶鬲に似てゐると云ふ）が出る。詳細な紹介は同氏の報告が未刊であるので今はさげねばならないが、私はその文化様相が台灣西海岸の文化様相に類似することに深い興味をもたされた。堯氏はとくに格子目の押型紋を有する台灣出土の土器に興味をもたれ、殊にブヌ族丹蕃の格子目押型紋を有する土器は器質といひ紋様といひ最も潮州史前印紋土器に酷似してゐるといつてゐた。我々は相携えて南支那海沿海文化の關係交渉の問題の研究を行つてゆきたいと話したが、氏は大陸に歸へられてから僅に一回の音信と國立中山大學文學院の文學第二期を惠送して下さつたのを最後とし

て連絡は絶えてしまつた。中共軍の華南進攻のためである。

「文學」第二期には顧鐵符氏の「廣東海豐先史遺址探險記上」がのつてゐて、國立中山大學文科研究所の一九四二年（民國三十一年）春に於ける海豐先史遺址の調査について見えてゐる。

當時上海から台北へ移つてきた中華書局なる書店で、新中華復刊第四卷第十六期に載つた石璋如氏の鋤頭下の蒼洱與中原なる報文を見て、廣西省の蒼梧、雲南省の洱海に於ける史前遺跡の發見と、戰時中のそれら華南に於ける工作の收獲について知つたが主題から離れるので今は紹介をさげたい。

二・二八事件直後魏道明氏が長官として來任されてからは所謂知日系に代る歐米系の人が各方面に増えたやうであるが、大學にもその傾向が見られ、陸志鴻氏も一九四八年の夏迄はその地位を保ち得ずして、中央研究院の莊長恭氏がこれに代つた。

化學の專家にしてドイツに長く學んだといふこの人はその時期の空氣を反映してか日本人留用學者に對しては冷い表情をもつてゐた。文學院長には錢氏に代つて沈剛伯教授がこられた。沈教授は國立中山大學及び武漢大學、國立中央大學の

史學系の教授として令名があり、國民政府編譯館の人文組の特約編纂の位置にあつた人である。英國に學びエジプトロジを専攻したといはれるだけに、民族學研究室にも屢々姿を現はし、筆者の仕事にも關心と同情とをよせてくれた。沈氏がともなつた教授の中に民族學的研究に關心をもち、その角度から中國古代史に切り込んでゆかうとする努力を續けてゐる李玄伯教授がゐる。その著中國古代社會新研は一九三九年（民國二十八年）に出てゐるが、抗戰中流布しない間に絶版となつたとのことで、一九四八年（民國三十七年）夏の序のあるものが開明書店から出てゐる。

内容は希臘羅馬古代社會研究序、中國古代圖騰制度及政權的逐漸集中、中國古代婚姻制度的幾種現象の諸項にわかれてゐる。興味深いのは中國古代の圖騰制と婚姻制度を扱つた項である。前者は中國史前時代には曾て圖騰制度が存在し圖騰團的組織を内包した。その制度の附帶的一現象として外婚等級等が考へられた。次に圖騰團は演變して地域化個人化の現象を發生せしめ、こゝに於いて圖騰の地域化と地名の姓氏化の定律が發生する。更に圖騰の地域化個人化の現象によつて生祖、地方神、自然神等が發生する。このやうな現象の綜合

的結果として最初全國に散在せる政權が漸く一身上に集中するといふのがその大要である。Frazer の Totemism and Exogamy は著者の圖騰制への眼を開かせた有力な導因をなしてゐるやうに思はれるが、著者は Durkheim にも學び又モルガンの古代社會にも學んでゐる。Malinowski の The Sexual life of Savages in Northwestern Melanesia, Spencer の Native Tribes of the Northern Territory of Australia, Howitt の The Native Tribe of the Southwestern Australia 等によつて未開社會習法に注意しつゝ中國古代社會の圖騰制を考へる上の手がかりとしてゐる。

中國に於けるトーテミズムの痕迹については Lanier の Totemic Traces among the Indo-Chinese (Journal of American Folklore 1916)、松本信廣氏の支那古姓とトーテミズ（史學第一卷二三號）Granet, Dances et Légendes de la Chine Ancienne 1926, A. Maspero, La Chine antique 1927, Edmond Erkes, Der Totenismus bei den Chinesen und ihren Stammverwandten 等の勞作を思ひ出すが、李玄伯教授はそれらは参照してゐないやうである。その論考の一節に圖騰神話及樂舞といふテーマを取上げられながらもグラネの研究には言及さ

れてゐない。

中國古代婚姻制度的幾種現象に於いては姉姪制、多性多妻制、姪與報の三つの問題を扱つてゐる。團的政權（父權）が長子一身に集るや姉妹共夫制が變成して姉妹共一夫制になる。即ち姉姪制である。更に團的政權（君權）が某一團的首領身上に集るや多姓多妻制が發生する。政權的世襲は當初兄より弟に傳へる時代の聚姪姪制が變じて父より子に傳へる時代の姪後母制になる。又兄より弟に傳へる時代から父より子に傳へる時代への推移は漸々演化して成るものであるから聚姪姪と姪後母とは同時に並存してゐる。姉姪は聚姪の反面であり聚姪は亦姪報の反面であるとするのである。

やゝ公式的な構成が印象されるであらうが、古典を自由に探りうる實力、董作賓教授の如き好友をもたれるために甲骨文研究の成果をとり入れての論證の内容は興味深いものであり、別の機會に紹介を試みたいものである。

李玄伯教授とは時々民族學研究室で顔を合はしたが恐縮する位謙讓にして溫厚な學者であつた。民族學的角度から中國古代社會史に切り込んでゆかうとする新しい態度は學生をひきつけてゐた。

莊校長は赴任以來大學經營が順調にゆかぬことのために早々にして辭意をもらしてゐたが、結局傅斯年氏が新校長として一九四八年の第一學期の終頃であつたか赴任された。

五四文化革命時代に急進的青年として若い血を燃やしたこの人も今では五十を越され、髪は白さを加へてゐた。思想的にはコミュニストと相容れない立場に立つ人ではあるが國民黨政府終末期の文化思想界に活動してゐる大きな人物の一人であり、そのリベラリストとしての卒直な態度は教授たちの人氣をよんでゐた。邊幅を飾らない性質の人らしく、濶達に論じ會ふといふ人のやうであつた。赴任後間もなく臺灣出身の教授たちを集めて日本時代の大學のレベルをすつかり落してしまつたことはなんとしても申わけはないと話されたといふことをある教授から聞いたが、さうした卒直な態度が好感をもつて迎へられてゐた。文學院の院長室で史學等の教授たちのお茶の會があつた時も出てこられて誰彼となくつかまへて談笑し、私のやうな中國語を解さないものには流暢な英語で話しかけられた。中國の名教授を集めてくる。さうして中國最高のレベルの大學をつくと抱負を屢々述べられてゐたが、他學部他系は知らないが史學系に於いては空前の盛觀を

呈するやうになつた。かつて臺北帝國大學には東西交渉史の權威として藤田豊八博士がゐたがその方面で博士に匹敵する人をつれてきたかつたが出来なかつたといつてゐたが、その方面でも新進氣鋭の方豪教授を迎へた。

藤田博士の業績は中國史學系の人にはよく知られてゐて、博士が臺北帝國大學時代におられたことから、博士の著書はないかと民族學研究室附屬のライブラリを訪れる人もゐた。王國維氏の令弟で英文學を講じてゐた王國華教授は王國維氏と藤田博士が友人であつたといふので懐しがられ民族學研究室を屢々訪れられて、博士についての思ひ出をよく話された。

國と國と相戦つたことの傷痕は久しく残ると思はれるが、友情は恩讐を越えて相戦へる國と國との人と人々とを離れ難いものに結びつけるものであることが、そこにも示されてゐた。

方豪教授は短軀ながらエネルギーを感じの人で、臺灣を足場として東南アジアの先史學民族學研究に、數々の業績をあげてゐる。鹿野忠雄博士に似た風貌は私になつかしい氣持をおこさした。教授には「方豪文錄」と題する論文集があ

る。一九四八年（民國三十七年）五月北京上知編譯館から出版された。この論文集は教授からいただいてきて京大史學の研究室に寄贈してある。五十二編に達する論考の大部分は明清期に於ける中國と西歐との關係を扱つたものであるが、

「清國禁抑天主教所受日本之影響」「中國在日歐初期交通史上之地位」に見られるやうに、近代日歐交渉史上に介在して中國の占めた位置を考へんとした論考も見られる。方豪教授は昨夏私が引き上げてから後、雜誌「臺灣文化」等によつて活躍を開始してゐる。「臺灣方志の利瑪竇」（臺灣文化第五卷第二期）同人著作中「臺灣漢文文獻糾謬述例」、「恒春縣志的發現」（臺灣文化第六卷第一期）「康熙五十三年測繪臺灣地圖考」（臺灣省文獻委員會專刊文獻創刊號）の惠贈をいたゞいてゐる。臺臺研究に關心をもつものにとつて何れも興味深いものであるが、同人著作中「臺灣漢文文獻糾謬述例」に述べられた批判は私なども赤面しつゝ甘受せねばならぬものである。

中共の國內に於ける征覇が進捗するにつれ、中共地區に役ずることを欲しないもので臺灣に來るものは次第にその數を加へつゝあつたが、國內から來る學生も次第に多く、はじめ

は臺灣出身の學生が大多數を占めてゐたが、臺灣出身の學生と國內より來る學生との比率は次第にその差が小さくなり、史學系の如きはかへつて國內より來臺した學生の數が島内出身學生に比してずつと多くなつた。

一九四八年の冬には臺北盆地の南西縁に位置する楊梅に中央研究院の歴史語言研究所が移動してきた。李濟博士、董作賓氏、石璋氏、芮逸夫氏、凌純聲氏らが小屯發掘の老大な資料や邊疆民族に關する民族學的資料を携えて來臺された。

間もなく董作賓氏は中國文學系の教授を兼ね、李濟博士は民族學研究室を接收されて史前史及び中國考古學の講義を担当され、芮逸夫氏は又史學系教授を兼ねて民族學の講義を担当されるやうになつた。

李濟博士は深い興味を高砂族の物質文化と臺灣の先史文化に對してもたれたやうであるが、臺灣先史文化の系統の中に中國東南沿海地方に親縁をもつものがあるとする金關丈夫教授や私の說に對しては積極的な意見を示さなかつた。然し大肚溪北岸營埔の先史遺跡の包含文化の示す龍山期文化への近縁性には注意をひかれたやうであつた。最も熱心な考古學志望の學生である宋文薰君に「自分が臺灣の黒陶を認めたくな

つたのは土器によるよりも石器があまりに近似を示してゐるからである」といふやうな意味のことを話したと宋君から聞いた。董作賓教授も黒陶には興味を示され、私が臺灣高雄縣大湖貝塚出土の黒陶について中國東南沿海地方の黒陶との關聯についてお聞きすると、山東のものに比して厚く、坑縣良緒鎮のものに近いといはれたことは興味深い。

李濟博士は歐州舊石器の豊富な標本と河北に於ける大發掘の成果の上に立つて、豊富な幻燈寫眞を用意されつゝ、史前史、中國考古學の講義を進められてゐた。董作賓教授は老大な小屯發掘の甲骨文の研究の成果の上に立たれて、郭沫若氏の古代社會の研究の基礎をなしてゐる甲骨文解釋の批判の上にその講義を進めておられたやうである。芮逸夫教授は中國邊疆民族に關する詳細な民族誌的講義をしておられた。折角同じ大學にゐながら中國語を解せずそのためにこれらの講義を親しい學生のノートを通してのぞいてゐたことは残念な極みであつた。

一九四九年の夏、私が文學院を去る準備を進めてゐた時、李、芮・董各教授、社會學の陳紹馨教授、中央研究院の石璋如氏らは助手の陳奇錄氏、學生の何生の何廷瑞、宋文薰兩君

を伴ひ、タイヤル族の發祥地マシトバオン社に調査にはいられた。

李濟教授はバシトバオン社のタイヤル族の人類學的測定を、芮逸夫教授は系譜を、董教授は曆を石璋如氏と陳奇錄氏は物質文化を何、宋兩君は通譯を擔當したやうである。陳紹馨教授の調査内容については未聞であるが、同教授の努力がこの調査行を生み出さしめたもののやうである。

陳奇錄氏は日本の第一高等學校に學び、海のセレクトジョン大學にて法律學を學んだ人であるが民族學的研究に熱心な關心を寄せ、中國の古典を自由にこなし、英語を自由にこなす力と、無類の速さと正確さで同本文を中國文に翻譯する力をもつてゐる上に、物質文化の採圖に立派な技術をもつてゐる有望な青年學徒である。

ほど見通しのついてきた臺灣先史時代の研究と多くの資料を残しフィールドを見棄ててくることに無限の愛情の氣もちを抱きつゝも、一九四九年の八月私は臺灣を去つたが、その後間もなく文學院内に考古人類學系が生れたやうである。

中央研究院からは石璋如氏が考古學部門に、凌純聲氏が民族學部門に教授としてはいられたと陳奇錄氏が知らせてくれ

た。凌純聲氏は芮氏とともに湘西苗族調査報告書をものされ
た人である。

芮教授はマシントバオンの收穫の上に立つてタイヤル族の親
子聯名制と大陸西南高原上の保羅、麼些族の父子聯名制とを
比較して基本的に相同してゐる點をあげ、しかしこれは心理
的同一性によるもので獨立發生的であると考へるといふ報文
を臺灣文化第六卷第一期に載せてゐる。

又李濟教授石璋如教授は何廷瑞、宋文薰兩君と共に埔里大
馬燐の石棺遺跡の發掘を昨冬行つたやうである。地方には苑
裡中學に劉茂源君のやうな若い好學の人がゐるし先史時代の
研究が愈々進捗するであらうことが想像される。

中央研究院の歴史語言研究所の考古學部門には梁思永氏の
やうな俊秀がゐるが國內にふみ留まつてゐると云ふから國內
に於ける研究の進捗に差し支へるわけではないやうである。

梁思永氏が一九三九年八月に *The Six Pacific Science
Congress* に於いて發表された *The Lungshan Culture, a
prehistoire phase*. は今尙龍山期文化についての成果の最高
の歸結をもつたものといわれてゐる。

筆者の臺灣時代の末期に臺北に出來た商務印書館の店頭で

斐文中教授の中國史前時期之研究一卷を入手した。平易に中
國史前時代が概説されてゐるが流石に河北を主體としてゐ
る。北平大學からきた學生から教授のこと、實地のフィールド
について演習のことなどきいたが、教授は研究に、且つ新し
い體制下の文化運動のリーダーとしても多忙な生活をもたれ
てゐるやうである。

尙中國系學者ではないが、北京の Catholic University か
ら Rad. Rahmann 師及びその同僚の學者が筆者の臺北時代
の末期に、北京から、中共進攻の難を去けて來た。

*Monumenta Serica Journal of Oriental Studies of the
Catholic University of Peking* の編輯者である Rahmann
師は、屢々民族學研究室を訪ねられた。

Rahmann 師及びそのグループの學者たちによる臺灣に於
ける民族學的研究を、我々は期待することが將來に於いて可
能であるかも知れないといふことを附加しておきたい。

——一九五〇・四・一三